

陸奥南部における古墳時代の終末

福 島 雅 儀

はじめに

1. 年代的位置付けの基準
2. 有力豪族層の古墳
3. 群集墳の展開と終末

4. 寺院と地方官衙の成立

5. 陸奥南部における古墳時代の終末

おわりに

論文要旨

ここでいう陸奥南部とは、現在の行政区分でいう福島県を中心とする範囲である。この地域は東北地方南部にあたり、古代日本の中では周辺地域とみなされる地方のひとつであった。また対象とする年代は、7世紀とその前後である。この時期は古墳時代から律令時代への転換期であり、日本史のなかでも最も大きな変革期のひとつであった。小論ではこのような地域と時代を対象として、古墳築造の終末過程と律令官衙の成立状況の分析をとおして、当時における周辺地域の社会的・政治的様相の一端を明らかにすることを目的としている。そこでこの論文では、主題にそって以下の課題を設定して考察を加えた。

1. 年代的位置付けの基準
2. 有力豪族層の古墳
3. 群集墳の展開と終末
4. 寺院と律令官衙の成立

さらにこれらを統合して、陸奥南部における古墳時代の終末過程についてまとめた。その過程は、大きく3段階の画期を経て完了すると考えられる。つまり、7世紀前半には6世紀代における有力豪族層の抑圧を経て群集墳が成立する。つぎに7世紀後半には、群集墳の盛行をうけて律令官衙が成立し、また宮ノ前古墳・谷地久保古墳という畿内的な有力古墳が築造される。最後は8世紀前半における律令体制の確立を受けて、古墳の造営が終了する。

以上の点から、古墳時代終末期の陸奥南部における地政的特徴には、その北部域や近接する関東地方とは大きく異なる様相が指摘される。それはこの地域が、古墳時代前期以来の伝統的な古墳文化を有する社会基盤のうえにあるが、強力な在地勢力は6世紀代に抑圧されてその勢力を失ったことから、7世紀代には中央政権による支配体制の変革が典型的に進められた地域ということである。